

③ 西区の動物介在活動支援事業

■ 露崎隆司・笹野哲雄

1—AAAとは

Animal Assisted Activityは、日本ではそのままアニマル・アシステッド・アクティビティと呼ばれたり、日本語に訳して動物介在活動などと呼ばれている。同じような意味で、CAAPA (Companion Animal Partnership Program)・PAPA (Pet Partnership Program) などがあり、人と伴侶動物(ペット)のパートナーシップ活動と訳されている。

元ハワイ大学の Allen Y. Miyahara 教授は自らの「人と動物の絆」論の中で「老人ホームに訪問用あるいは常在のペットを置くと、多くの人の精神的幸福感が高まる」と言っている。ハワイにある動物愛護協会 (Hawaiian Humane Society) には、老人ホームにペットを連れて行くボランティアがいるが、ホームにいる老人が示す関心や喜びの声は心温まるものであり、老人たちは定期的なこの訪問を非常に楽しみにしている。動物達との接触は、老人達を明るくしお互いにそのことを話題にするようになる。これまでまったく孤立していた多くの老人達が動物達には反応するようになったとも述べている。犬とふれあうようになつてから、反応のなかった老人が笑顔を見せるようになったなどのケース以外に、自

閉的な子供が少しずつ自分の殻から出てきて話をするようになったなど、犬や猫、時には馬やイルカなども含めた多くの動物が人々の生きがいや障害のリハビリ、ケアに介在し活躍している。

近年のペットブームと核家族化、少子化、そして高齢化、このような背景にたつてこの数年日本でもこの分野に対する関心は大きく広がった。しかし、マスコミなどでペットを取り上げる時には往々にして「奇跡の」「感動の」といった物語調になり、どうしても医療補助や福祉としての側面に光が当たらない現状であり、市民の周知度も高まらない状況である。

AAAと類似したもので Animal Assisted Therapy (動物介在療法) がある。医療の専門家とボランティアが協力して、動物が人に与える効果を利用して、治療としてのプロゲラムがたてられ実施されている。セラピーとして動物の介在を考えている医療関係者からは、この分野で先進国と言える欧米諸国との違いを痛切に感じているとの声も聞く。欧米諸国には、動物との関わりやボランティア活動も含めて長い歴史の中で培われた土壌があり日本とは大きく異なるが、欧米諸国では多くの実績と研究がなされており、確固たる成

果が多くの研究者、医学者に広く認識され、実際に医療にも活用され市民にも浸透している。

AAAが我々日本人の目に止まり始めたのは、今から十数年前のことであり、日本において、広く社会にこの活動が受け入れられるには、もう少し時間を必要とすると思われる。しかし、自分の飼っている動物たちと共に活動し、老人たちの生活に少しでも潤いを与えることができるのであれば、そして、諸々の条件さえ整備されれば行動したい、そういった意気込みから民間団体および行政が数えられる程度ではあるが、実践に踏み切っている状況である。

どうしたら生きがいや生活のリズム、心の支えを失った人々が、生きる希望を取り戻し、頑張ろうと思ってくれるのか、何をすればもう一度笑顔を取り戻してくれるのか、生きていて良かった、と思ってくれるのか、そのためには何かできることはないのか、何か支援できないのか、その一つの方法としてあるのがAAAであると言えよう。

2—個性ある区づくり推進事業として

AAAを行うに至った経緯

- 1—AAAとは
- 2—個性ある区づくり推進事業としてAAAを行うに至った経緯
- 3—西区での具体的事業の取り組み

西区では、平成十年夏、犬のフン害防止キャンペーンを行った。これは犬の飼い主、小中学生とその保護者を対象としてボランティアをつくり、公園などでの啓発チラシ配布とフン掃除の両面から行われた。このときの参加が基礎となり、犬を中心とした地域の様々なボランティア活動の核となつて機能し、保健所が計画した飼育指導やしつけなどの動物関連の啓発事業に連動するかたちとなった。更に熱心な保護者のはたらきにより、後の小中学校訪問での動物とのふれあいと動物愛護の啓発といった授業の一環として取り入れられるきっかけとなった。

一方、平成九年の横浜市の統計データを見ると、六十五歳以上の人口は三十六万八千七百七十四人で、これは市民の一・一％にあたる。西区はというとその割合が一六・五％と市内で最も高く、高齢社会が一番進んだといえる。更に六十五歳以上の夫婦だけの世帯と六十五歳以上の独居者は合わせると四千三十九世帯（二一・七％）あり、これも市内で最も多い割合となつている。それに対して犬の登録数を見てみると、西区は千九百九十四頭で、登録数も世帯あたりの頭数でも最低の値となつている。また、犬の飼育割合から猫の飼育頭数を予測（厚木市実施調査結果より）し、犬猫の飼育頭数を推定すると、西区では約四千七百頭が飼われていることになるが、これも市内では五・五世帯に一頭の割合に対し、西区では七・三世帯に一頭の割合となる。従つて西区では動物と接する機会が少ない老人が数多くいることになる（表一）。このような状況を見据え、平成十年に前述のとおり

り動物をテーマにした地域での様々な取り組みを支えた方々と、AAAについて議論する中で、西区の特別養護老人ホーム（以下「特養ホーム」という）へ動物とのふれあいによる生き甲斐の宅配ができないかといった考えが出された。

以上のような背景があつて区づくり事業の一環として、動物介在活動支援事業はスタートした。

3 二西区での具体的事業の取り組み

① 事業の目的等

国内では、民間のCAP活動は多少あるが、行政での取り組みは、全国で数例あるだけである。そんな中、西区では、平成十一年度から個性ある区づくり事業の一環として「西区動物介在活動支援事業」をスタートさせたわけだが、事業目的を一言でいえば、「人と動物の関係から生まれる地域共同参加による福祉活動の実践」となる。加えて、更に我々が目標とするところは人と動物とがよい良い関係を築き上げていくために、動物に対するマイナスイメージを少しでもプラスイメージに変えていく狙いを含んでいる。

② 事業の進め方

本事業の参加者には、事前に事業の主旨をよく理解してもらうことが必要であり、また、当面の訪問先として考えた特養ホーム施設側の事業への理解と受け入れの協力を取り付け

る必要がある。

図一は事業フローであるが、ボランティアの募集から実践活動までは約一年の期間を要するものと想定した。

ボランティアの募集は、広報よこはま西区版を中心に行い、平成十一年度九人、平成十二年度十人の応募があつた。

次に、選考であるが、本事業参加のボランティアに一定の条件を付した。一つは本事業の主旨をよく理解しているかということ。二つ目は行動力があり、ボランティア活動に意欲的であるかという点である。

一方、ボランティアと同伴する動物は平成十一年度、十二年度は犬（以下「ボランティア犬」という）のみに限定して募集した。動物の健康状態、資質、性格の問題が大きなウエイトを占めるため、それらのチェックを行うためのシート（表三）を用いて、選考会を開催した。選考委員は、獣医師、トレーナー、行政の三者がこれに当たつている。初年度（十一年度）は、応募九組中六組、十二年度は応募十組中六組を合格とした。

訓練は、原則的に一週間おきに九回コースで行うこととしている。初回に基本的な犬の習性や人獣共通感染症についての知識を得るための講座を受講してもらい、その上で八回の実地訓練（服従訓練）を行う。訓練指導には、民間のCAP活動経験のあるトレーナーがあつた。

実際の訪問活動が始まつたのは、平成十二年三月からである。十一年度の募集に応じ、訓練を終えた五組（十一年度合格した六組の

表一 横浜市と西区の比較 (平成9年度)

	人口	世帯数	65歳以上	犬登録数	犬猫飼育数(推定)
横浜市	3,308,631	1,305,242	368,774	105,500	237,000
西区	75,382	34,536	12,449	1,994	4,700

表二 参加者・団体と役割

参加者	役割
動物の飼い主	老人ホーム等へ訪問し、動物たちと共に老人たちと接する
トレーナー	動物にしつけ、訓練を施し、訪問事業に支障のないレベルまで到達させる
獣医師会	動物の健康状態、人獣共通感染症のチェックと予防
行政	上記参加者全体のコーディネート及び事業の進行管理等

うち一組は訓練終了後、都合により活動中止が第一期生として、特養ホームへの訪問を行った(平成十二年三月から十三年二月までに六回実施)。活動の場面を写真で紹介するが、実際の活動時間は、施設側の意見や犬へのストレスを考慮し、約三十分としている。実際の活動に入る前に、毎回、獣医師にも施設に来てもらい、健康チェックを行うこととしている。また、事前に簡単な打ち合わせをしてから活動に入る。活動はボランティアがお年寄りの反応を見ながら、順番にお年寄りの側に犬をつれて行くかたちで、特に犬が嫌いな人には無理強いはいしないことはもちろん、万遍なく平等に接することができるよう、臨機応変な対応が図られている。そして現在のところ、施設側の職員の介助も重要な役割を果たしており、老人との接触の誘導には欠かせない状況である。

引き続き行う反省会では、己憚らない意見や反省点が提示され、次回に結びつく内容のものが真剣に語られる。犬の訓練は一過性に終わるものではなく、何より継続が大切である。トレーナーのもとで、ある程度の基本的服従訓練とその手法について学んだとはいえ、そのことを飼い主が繰り返し行っているよう、また訪問活動や訓練上の疑問点を解消するため、ボランティア同士の打ち合わせ会や訓練のフォローアップも行っている。

③ 動物は物言わぬカウンセラー

老人ホーム等での動物介在活動には、次のような効果があるといわれている。

- ・ 動物を見ることにより、ほとんど無表情であった人に、明るい表情が戻った。
 - ・ 動物に触れようとする行動がリハビリに役立つ。
 - ・ 老人、ホームの職員、ボランティアが一緒に楽しく過ごせるため、和やかな雰囲気がかもしだされ、心身の活力となる。
 - ・ 次回の動物の訪問を楽しみにし、生活にはりあいができる。
- そこで、実際に活動中のお年よりの表情や態度にどのような変化があったかなどを知るために、施設側の職員へのアンケートをとることとした。その結果を図-2に示す。

表-3 選考会チェックシート

平成 年 月 日

西区動物介在活動支援事業選考会チェック表

飼い主 住所・氏名・電話	西区〇〇町〇丁目〇番〇号 〇〇 〇〇 TEL△△△-△△△△			
犬の名前 種類、性別、年齢	〇〇号 △△△△ メス △歳			
選 考 内 容				
(1) 飼い主の適正	ボランティア参加の意欲 犬のしつけ・健康管理への関心 ボランティア適性 過去のボランティア歴	高 優 有	中 良 不	低 低 可 無
(2) 犬の状態	健康状態 外 観 ボランティア適性 獣医師への反応	優 優 優	良 良 良	不 可 可 可
(3) 車イスへの反応	白衣の人間 車イスの人間 車イスの人間(杖)	優 優 優	良 良 良	不 可 可 可
(4) うば車への反応	母 親 赤ん坊	優 優	良 良	不 可 可
(5) 幼児への反応	父 親 幼 児	優 優	良 良	不 可 可
(6) 猫への反応	飼い主 猫	優 優	良 良	不 可 可
(7) 音への反応	電話帳を落とした時の反応	優	良	不 可
(8) 犬への反応	飼い主 犬	優 優	良 良	不 可 可
その他				

図-1 事業フロー

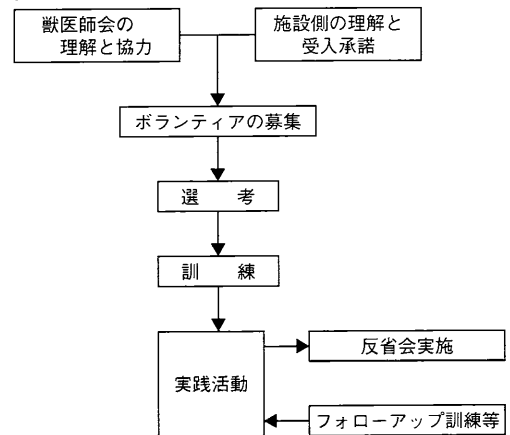


写真-2 訓練風景



写真-1 訓練風景



これからもわかるとおり、日常、お年寄り
と接する機会が多い介護者側からは、表情の
やわらかさ、笑顔の多さなどがあらわれたと
か、犬への接触行動も見受けられたなどの声
があがっている。ボランティア犬の名前を覚
えている老人も少なくない。次の機会を楽し
みにし、「またね」と声をかける老人達も見
受けられる。

④ 課題と今後の方向性

事業を進めるなか、課題として浮かび上
ってきたものに、犬以外の動物（猫、ウサギ、
モルモットなどが考えられる）の参加手法、
ボランティアの確保、他の施設（例えば、小
児療育機関、グループホーム等）への訪問等
がある。それと同時に、本事業のボランティ
ア自身による「自主運営化への円滑な移行」
という課題がある。現状では、行政側が事業
推進の中心になっていることは否めない。し
かし、本事業はあくまで、ボランティアア
グループ自身の自主活動となることを最終形態
と考えており、行政は支援という立場を取る
こととしている。

試行錯誤の中で歩み始めた本事業である
が、これらの課題を解決しながら、今後の事
業の取り組みにつなげていきたいと考えてい
る。
△露崎Ⅱ西区保健所衛生課長／笹野Ⅱ同課食
品衛生係長▽

図-2 アンケート結果

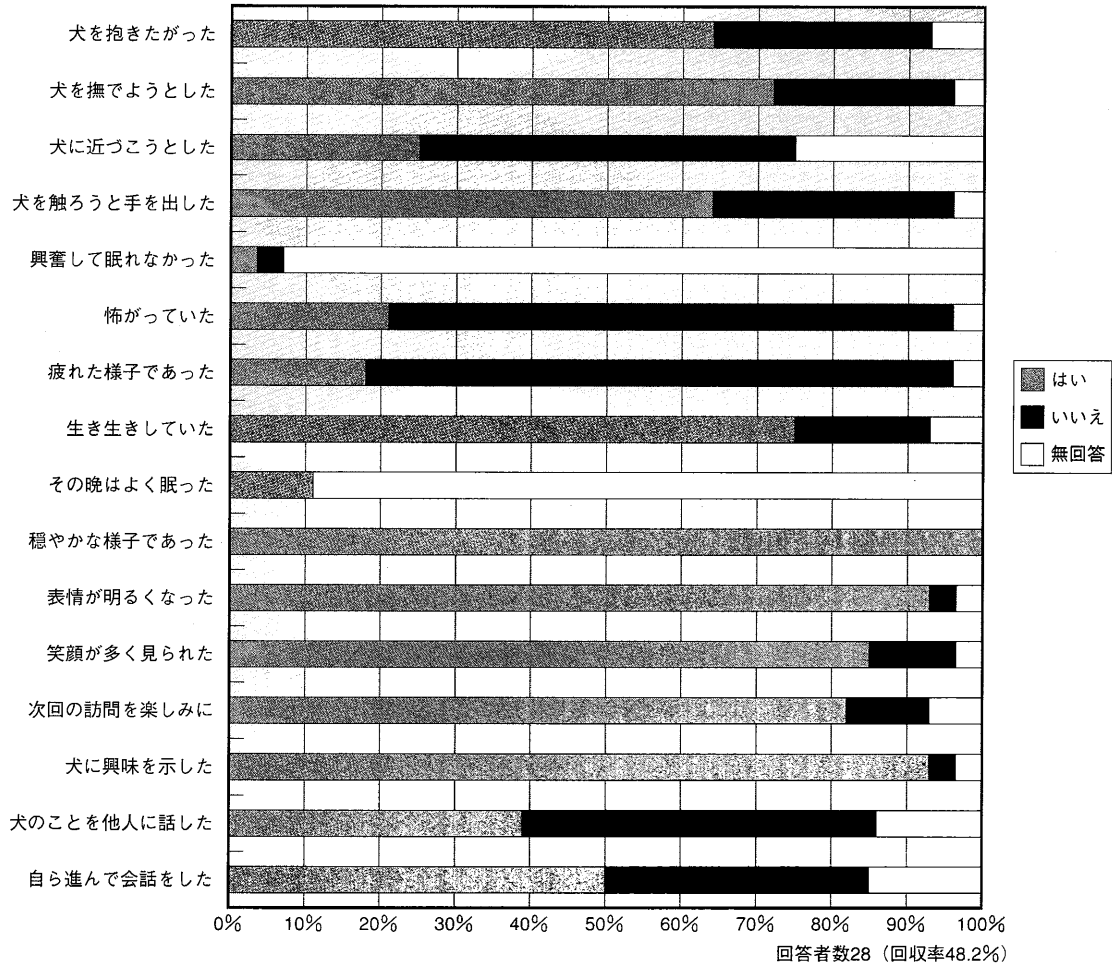


写真-4 訪問活動風景



写真-3 訪問活動風景

